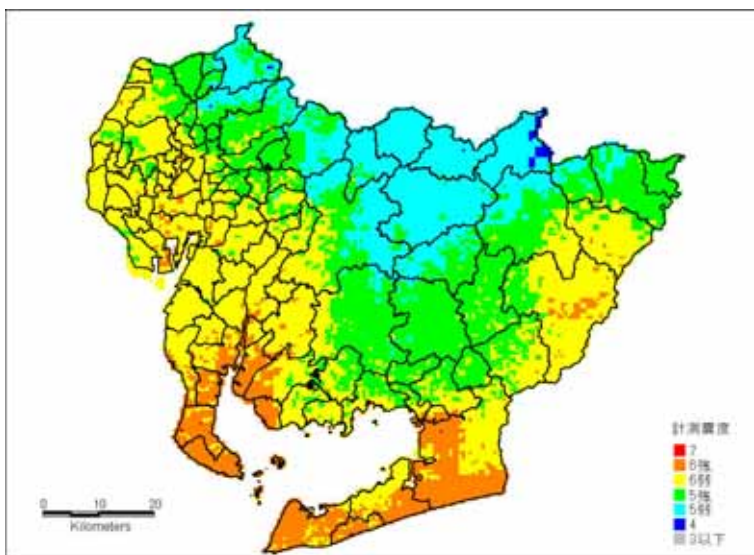


地震災害シナリオ

これは平成 14 年度に愛知県が実施した地震被害想定結果を基にしています。
図の市町村の区分等は平成 15 年度のものです。

(1) 自宅にいた場合

早朝の時間帯であり、家族はみんなまだ眠りについていましたが、私は何かぐらっという小さな揺れを感じたように思えて、目が覚めかけていた。「ん？地震かな」と思って見たものの、揺れが続いている様子もなかったため、気のせいだと思い、また寝ようと思ったその時、突然、今までに経験したことのないような激しい揺れを感じた。その瞬間、私は掛けていた布団を強く握りしめ、とっさに頭を覆った。照明器具が大きく揺れ、部屋中のものがガタガタと音を立てて揺れ、だんだん激しい揺れになった途端に、家具がぎしぎしと前後に移動して今にも倒れそうになったため、私はあわてて家具を支える動作をした。阪神・淡路大震災の話では建物の倒壊によるものだけでなく、家具の転倒により亡くなった人も多い¹と聞いており、日頃から「もしこの家具が倒れてきたら大変だなあ」とは思いつつも、結局何も転倒防止対策をしていなかった²、「しまった」という思いが強かった。ゆっさゆっさと大きな揺れが続き、この揺れがいつまで続くのかと思うぐらい長く揺れた。揺れている間、まったく動くこともできず、ただただこの家が潰れやしないか、この家具が倒れやしないかと不安でしかたなかった。



想定東海・東南海地震連動による震度分布図

数分後に揺れがやっと収まり、結局家具は倒れなかったため、私も妻も何も怪我はなかったが、部屋中、家具の上の置物やガラスケースの破片が散乱して足の踏み場もないほどのひどい状況になっていた。まだ暗く、照明器具のスイッチを入れてみたが、つかなかった。停電³になったようだ。暗い部屋の中歩くのもままならない状態であった。阪神・淡路大震災での被害の話を聞いた時から部屋の中ではスリッパを履くことにしていたので、散乱したガラス片の上でも歩くことが

数分後に揺れがやっと収まり、結局家具は倒れなかったため、私も妻も何も怪我はなかったが、部屋中、家具の上の置物やガラスケースの破片が散乱して足の踏み場もないほどのひどい状況になっていた。まだ暗く、照明器具のスイッチを入れてみたが、つかなかった。停電³になったようだ。暗い部屋の中歩くのもままならない状態であった。阪神・淡路大震災での被害の話を聞いた時から部屋の中ではスリッパを履くことにしていたので、散乱したガラス片の上でも歩くことが

¹ 阪東他「阪神・淡路大震災における人的被害に関する研究その4 死亡状況からみた人的被害について」(日本建築学会大会学術講演梗概集(近畿)、1996年)のアンケート結果によれば、阪神・淡路大震災による死者の発生要因は、柱などの下敷きが全体の約74%、家具類の下敷きが約20%であった。

² 「平成15年度防災(地震)に関する意識調査」(愛知県)によれば、「家具の転倒防止対策をしている」は31.0%である。

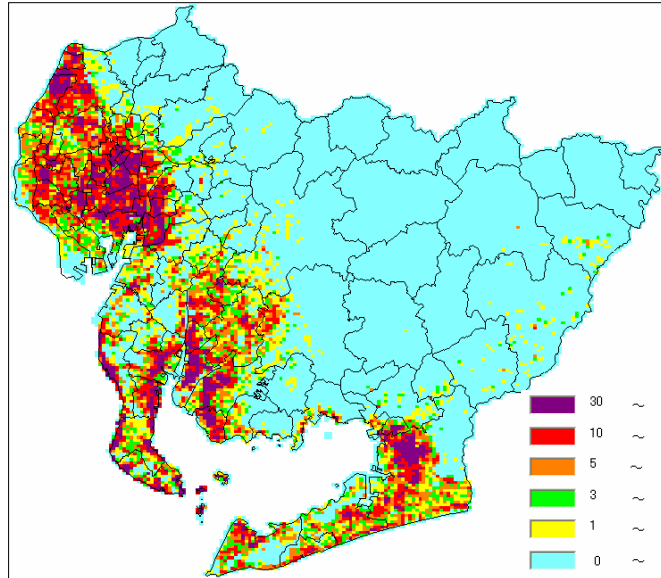
³ 停電率は全県で約14.5%であり、20%を超える市町村も多い。

できた。私と妻は「怪我もなく無事でよかった」と思うとともに、隣の部屋で寝ていた娘と愛犬シロの様子に気がかかった。隣の部屋に行き、ドアを開けようとしたが開かない。大きな揺れのせいで家自体は倒壊するほどの被害ではなかったものの、壁がゆがんでドアが開かなくなっていたのだ。「大丈夫か～！」と廊下から娘に声をかけた。中からはシロの鳴き声は聞こえるものの、娘の返事が聞こえない。私はどうにかしてドアを開けようと、力いっぱい足でドアを蹴った。何とかドアが開いたが、私と妻の目に入ったのは娘が倒れた家具に挟まれ動けなくなっている光景であった。隣ではシロがしきりに吠えている。私と妻は死に物狂いで、娘とタンスの間の隙間を広げ、娘の体を引き出した。娘は手首を骨折したようだが、命に別状はなかった⁴。

119番に電話をかけようとしたが、輻輳してかからない。次に携帯電話でかけてみたが繋がらない⁵。119番に多くの電話が殺到し輻輳しているようだ。他にもさぞかし多くの死傷者が出ているのだ

ろう。阪神・淡路大震災の惨劇が頭をよぎった。停電でテレビが見られないため、準備していたラジオをつけると、東海地方で大きな地震が発生したことは伝えられていたが、詳しい情報はまだ入っていないようだった。私は娘を連れて、近くの病院へ向かうことにした。

家を出ようとした時、遠くから消防車のサイレンが聞こえてきた。「火事も発生したのか。大変なことになったぞ。」と思った⁶。家を出た時、隣で人の声が聞こえた気がした。「うう誰か・・・」お隣は一人暮らしのおばあちゃんの家だが、よく見ると、家は跡形もなく崩れ落ち倒壊していた⁷。今病院に行っても混乱するだ



想定東海・東南海地震連動における、揺れ・液状化による建物全壊棟数

⁴ 冬朝5時発災ケースにおける人的被害は、全県において死者約2,400人、重篤者約320人、重症者約1,200人、中等症者約6万4千人と想定される。なお、ここで、重篤者とは入院を要する負傷者のうち生命を救うため直ちに処置を必要とする人、重症者とは入院を要する負傷者のうち多少の治療の時間が遅れても生命に危険がない人、中等症者とは入院は要しないが医師による治療が必要な負傷者を指す。

⁵ 一般固定電話だけでなく、携帯電話でも災害時には輻輳が発生する可能性がある。なお、災害時には音声通話よりも電子メールの方が輻輳の影響を受けにくい。このため、携帯電話や常時接続のインターネットからの電子メールの方が安否確認がとれる可能性がある。

⁶ 冬朝5時発生ケースでは、全県における全出火件数は約160件、そのうち住民らによる初期消火ができない炎上出火件数が約70件、さらに消防活動でも消せず延焼拡大する火災もあり、焼失棟数は約590棟と想定される。なお、火災の最大ケースは冬夕18時発災の場合で、全県における全出火件数は約1,200件、炎上出火件数は約500件、延焼拡大件数は約150件、焼失棟数は約4万9千棟と想定される。

⁷ 揺れ・液状化による建物被害は、全壊約9万8千棟、半壊約23万棟、大破約4万棟、中破約6万2千棟と

けでおそらく治療はしてもらえないだろうと判断⁸し、私は娘を妻に預け、大声で近所の人を呼んだ。命に別状はないと思われる娘には自宅にあった救急セットでとりあえず添え木をあてるなどの応急手当だけを施し、人命救助を優先させた。近所の人々が2、3人集まってきて、おばあちゃんを助け出そうとしたが、救助するための道具もなく、少人数では手の施しようがなかった。しばらくして、だんだん周辺の人が集まってきたので手分けして手作業で救助活動を開始した⁹。そうしている間にも大きな余震が発生し、潰れた家屋の木材が自分の方へ倒れかかってきた。大規模地震の後には比較的大きな余震が頻繁に続くため、二次災害のおそれもあった。途中から消防の人も駆けつけ、安全を確認しながら専門的な救助資機材を使って効率的に救助活動を進めた。作業を開始して5時間が経ち、やっとおばあちゃんを救出することができた。しかし、おばあちゃんはもう既に亡くなっていた。「地震直後は声も聞こえていたから、早く助けることができていれば命を救うことができたのに」と悔しくて悲しくて涙がこぼれた。

夜が明けて時間が経つとともに、被害の状況が明らかになってきた。周辺の多くの家でもひどい被害だったようだ。倒壊した建物も多く、また建物自体には大きな被害がなくても台所では食器棚が倒れたり、食器棚の引き戸が開き食器が落下・散乱し、またオーブントースターや電子レンジが落下した。路上ではブロック塀が倒壊したり、瓦が落下するなどの被害も発生していた。食事時であったなら、今回よりも火災が多く発生していただろうし、昼間の人々が活動している時間帯にこんな大きな地震が発生していたらと考えるとぞっとした。

私が住んでいるこの地域は古くからの住宅街ということもあり、被害が多く発生した一方で、近所同士親しい付き合いがあったことが唯一の救いとなった。積極的な救助活動への参加や、高齢者等の避難誘導への積極的な協力が見られたのだ。隣のおばあちゃんは不幸にも亡くなったものの、地域住民の救助活動によって生き埋めにあった人の約7割が救助されたと後で聞いた¹⁰。この震災を通して、住民自らによる防災活動の重要性を痛感し、また日頃から地震など災害に備えた心がけや耐震化¹¹などの備え、町内会・自主防災組織と連携した防災訓練への積極

想定される。なお、全壊・半壊は財産価値の損失を表す被害区分であり、大破・中破は構造的被害を表す被害区分である。

⁸ 医療機関等においては、医療機能が制約される中で、一人でも多くの傷病者に対して最善の治療を行うため、傷病者の緊急度や重症度によって治療や後方搬送の優先順位を決めるトリアージが行われる。

⁹ 冬朝5時発生ケースにおける要救助者は全県で約2万3千人と想定され、この時間帯では多くが木造建物でのものである。昼間の時間帯の場合は救助困難性が比較的高い非木造建物での要救助者が増加する。また、冬の場合には寒さのせいで救助が遅れることで亡くなる危険性が増大すると考えられる。

¹⁰ 阪神・淡路大震災では発災直後の段階では家族・近隣住民を中心に救助活動が行われ、要救助者の約7割を家族・近隣住民が救出したとされている。

¹¹ 「平成15年度防災（地震）に関する意識調査」（愛知県）によれば、住まいの地震対策について「建物は地震に対して安全と思うので、特に何もしていない」が24.6%、「地震に対して建物に不安はあるが、特に何もしていない」が63.4%、「耐震診断を受けた（受けている）」が4.1%、「耐震改修をした（している）」が2.5%である。また、一部を除く各市町村で昭和56年5月以前着工の木造住宅（在来軸組構法）の無料耐震診断や耐震改修補助を実施していることについて、どちらも知らない人は30.2%である。

的な参加が必要だと痛切に感じた。また、地震直後の初期段階で住民が救助活動を進められるように、住民が簡単に使えるような救助資機材が各地に配置されていればなおよかったのにと感じた。

私たちの家は、倒壊は免れたものの家が傾き、余震が続くことへの不安などもあり、とても住める状態ではなくなったため¹²、指定避難所になっている近くの小学校へ避難することにした¹³。家を出る際には電気のブレーカーを落とし¹⁴、日頃からまとめておいた非常持ち出し品を持って、戸締まりをし、避難先や安否情報を書いたメモをドアに貼ってから避難するようにした。

学校へ行くと、もう既にグラウンドに多くの人が詰めかけていた¹⁵。地震の揺れで家が壊れた人、液状化で家が傾き住めなくなった人、家は無事だが停電・断水の状態では家にいることもできないと判断した人などであった。私たちは避難所に設置された救護所で娘の手当をしてもらい、また、食料や水、毛布などが配られたが、ここで当面生活をしないといけなくなることを思うと、被災者になったことを実感させられた。

最近では多くの家庭でペットを飼っており、ペットは家族の一員でもあるため、学校に避難した人の中にもペットを連れてきている人が多かった。避難者の中には動物が苦手な人も多いただろうし、この避難所においてシロと一緒に暮らすことができるかどうかはかなり心配であった。結局、ペットを伴った避難者と他の避難者が話し合いの場を持ち、「ペットは指定された場所ですぐにケージなどで飼うこと」「屋外の指定された場所で排泄させきちんと後始末をすること」などの基本的なルールを決めてそれをしっかりと守ることで、大きな問題もなく共同生活を送ることができた¹⁶。もちろん、ペットに関する問題が少しは発生したが、みんなが不安な生活を送る中で、ペットの存在が心の安らぎや日常性を与えてくれたのも事実であった。

また、ここではトイレの問題も大きかった。自宅のトイレは水洗トイレでそれ自体に被害はなかったのだが、断水によって水がないため、使用できなかった。したがって、避難所の既設のトイレを使うことになったのだが、プールなどの水があるのでトイレ用水は確保できるものの、多くの人が一度に使うのですぐに詰まるなどの問題が発生した。交通事情により仮設トイレはまだ届いておらず、仮設トイレが来るまで、仕方なくみんなで協力して校庭に臨時的穴掘りトイレを作るなどで対応した。ほとんどの人が水洗トイレに慣れてしまっているため、はじ

¹² 地震により被害を受けた建築物については、二次被害を未然に防止することを目的として、余震等によって倒壊する危険性や外壁等の落下の危険性を、応急危険度判定士が調査し、建築物の使用が可能かどうか応急的に判定する応急危険度判定が実施される。

¹³ 「平成 15 年度防災（地震）に関する意識調査」（愛知県）によれば、「自宅近くの指定避難場所を知っている」と回答した人は 81.6%、「知らない」と回答した人は 16.3%である。

¹⁴ 阪神・淡路大震災の際には、地震で電気配線等が損傷した後に電気が復旧することで、通電火災が発生した。

¹⁵ 全県における自宅建物被害を原因とする避難所生活者は約 19 万人であり、それらの人以外に自宅建物に被害がなくても断水等ライフライン機能支障を理由として発災 1 日後で 58 万人、1 週間後で 23 万人が避難所に避難すると想定される。なお、約 1 ヶ月以降あたりから応急仮設住宅への入居が始まるが、需要世帯は約 3 万 2 千世帯と想定される。

¹⁶ 阪神・淡路大震災の際にはペットの受入ができない避難所がある一方で、住み分けすることでうまく対応した避難所があった。ペットを飼っている人にとっては、日頃からのしつけをしっかりとしておくことで災害に遭った場合の避難生活にも対応できるようにしておくこと、そして被災時には被災者間のコミュニケーションによる相互理解、飼育ルールの徹底等によって、避難所でのペットとの共同生活が送れるような環境づくりが必要である。

めは使い方もわからず多くの問題が発生した。避難所においては避難者自らが自立し、お互いに協力し合う生活を送ることが大切であるが、はじめはごみが散らかるなどの混乱¹⁷が見られたものの、しばらくすると避難者の中にリーダーが生まれ、ボランティアの人もリーダーシップを発揮して、トイレの使用ルールや避難所での生活ルールなどを作って、それをみんなで守ることで徐々に生活がスムーズになった。

それでも時間が経つとともに、急な生活環境の変化や将来への不安などから精神的にダメージを受ける人や、高齢者を中心に風邪をひくなど病気にかかる人が多く発生した。避難所には救護所をはじめ、いろいろな相談窓口もできたのだが、私も今後の生活を考えると、冬の寒さが身にしみた。

(2) オフィスにいた場合

その日は明日が切の原稿を仕上げるため、昨晚から寝ずの仕事が続いていた。昼 12 時をちょうど過ぎた時であった。私は高層ビルの 20 階にあるオフィスにいたのだが、近くの女性社員が突然「地震！」と叫んだ。私ははじめ何のことかわからなかったが、だんだんと揺れが大きくなり、激しい横揺れとなっていった。私はとっさに机の下に身を潜めようとしたが、机もゆっさゆっさと大きく揺れて動きのとりようがなかった。災害時の活用のためにヘルメットが用意されていたが、揺れている間は動くこともできなかった。

私のオフィスの状況はロッカーや書棚などがたくさん置かれ、ほぼ全面ガラス張りでもあり、地震を考えると非常に危険な環境であった。整理の悪い私の机の上の書類の山は崩れ、隣の机にあったパソコンは大きな揺れで机の上から滑るように落下した。また、ロッカーが大きく揺れ、かなり多くが倒れる様子が目に入った。「キャー！」という女性社員の声が聞こえた。高層ビルは上階に行くほどよく揺れ、そのため棚等が倒れる危険性が高いと聞くが、本当だった。地震の規模が大きかったせいもあるが、かなり多くの書棚などが倒れた。また、壁にはひびが入り、危険な状況であった。近くの窓ガラスは幸運にも割れはしなかったが、網入りのガラスでもないし、飛散防止フィルムも貼っていないため、割れたら屋内・屋外ともに大きな被害が出ていたと予想された。同じフロアの何人かの社員が倒れてきたロッカーの直撃に遭って負傷した。後で聞いたが、近くのビルでは中間階の構造が潰れたところもあり、数名が亡くなっただけらしい。私のオフィスではそれほどの大きな被害はなかったが、それでも多くの負傷者が発生した。私はうちの会社には救急箱ぐらいあるだろうと思っていたのだが、地震の備えに関してほとんど何の用意もなかったみたいだ。家族はどうしているのかと思い、家に電話したが、地震の影響で電話はつながらなかった。携帯電話も使ったが、輻輳してつながらなかった¹⁸。

廊下は多くの人でごった返していた。エレベーターも揺れのために停止していた。何人かがエレベーター内に閉じ込められているようだった。私はどうやって

¹⁷ 夏場の場合、衛生上の問題が発生する可能性がある。

¹⁸ 家の電話や携帯電話がつかない時は公衆電話を利用するとつながる場合がある。公衆電話は優先電話として位置づけられているためである。停電の場合、カード式公衆電話は使えなくなるが、10 円玉を投入すれば使用することができる。家庭での非常持ち出し品には 10 円玉も入れておくとう有効である。

彼らを助ければいいのかろう、我々はどうやって下まで降りればいいのかろうと心配になった。しばらくすると、ビルの防災センターから非常放送が行われ、「階段を使って慌てず冷静に避難して下さい。」といった避難指示が行われた。閉じ込めにあった人の対応をする者、負傷者の搬送や応急手当をする者以外は順次屋外へ避難したのだが、玄関前は多くの人で混乱した状態となっていた。至るところで同じような様相になっているだろうし、おそらくは交通機関も運行を停止しているだろうから、私のように家に帰れなくなる帰宅困難者¹⁹がたくさん出るのだろうと思った。

(3) 駅構内および電車内にいた場合

私はその時帰宅ラッシュの電車に乗っていた。電車内は雨のためかいつになく混んでいて新聞を広げることでもできず、吊革をやっとのことで掴める状況であった。突然、大きな揺れを感じるとともに、電車は急ブレーキで減速した。「わぁ！」立っていたほとんど全ての乗客が電車の進行方向に飛ばされた²⁰。いわゆる将棋倒しの状態になり、何人かが負傷したようだった。

幸いにも死者が発生するような被害にはならなかったが、私の乗った車両ではあまりの衝撃で大混乱になっていた。勝手にドアを開けて外に出ていく人もたくさん出た。しかし、すぐに車掌さんが誘導してくれ、私を含めた多くの方は線路伝いに最寄り駅へと向かった。応急手当の方法がわかる一部の人が負傷者の手当や搬送に当たったのだが、私も応急手当や人工呼吸²¹ぐらいできないとまずいなと思った。駅へと向かう途中では、高压電線が切れて垂れ下がっており、非常に危険であったため、触れないように気をつけて歩いた。駅でも多くの方が帰宅の足を奪われ、人であふれ返った状態になっていた。時刻表の看板などが落下し、通路には多くの破片が飛び散っていた。また、ホームには電車を待つ人があふれていて、最前列にいた人の中にはホームから転落し負傷する人も出たという。駅舎内の危険としては、屋根が落下したり、看板等が落下する被害などが考えられたが、この駅舎の屋根は比較的軽量であったため、死者が出るほどの大きな被害には至らなかったようだ。ただ、落下してきた破片でかすり傷を負った人はたくさん発生した。

この地震においては知多半島及び渥美半島、三河湾沿岸部を中心に全県的に被害が発生し、名古屋市等の尾張南部でも震度6強となったため、これらの地域の鉄道では運行支障が発生した。復旧にもかなりの時間を要し、帰宅の足だけではなく、併せて静岡県を中心に甚大な被害が発生していることから東西交通に大きな影響が発生した。

¹⁹ 都市部の県下全域で震度6弱以上が発生するため、ほぼ全域的に交通機関が停止すると想定される。この場合には、全県で約98万人の帰宅困難者（名古屋市で約47万人）が発生すると想定される。

²⁰ 万一の事態として、震度6強以上程度の地域で、新幹線・在来線の脱線事故等が発生する可能性がある。

²¹ 災害時に負傷者が出た場合には救急隊員が現場に到着するまでには時間がかかり、そうしている間に手遅れになることもあるため、その場にいる人たちが救命手当をすることが重要である。また、一度に多くの方が負傷し医療機関が混乱する可能性があるため、軽症程度の負傷者の場合は現場で応急手当を施すことも必要である。応急（救命）手当については、日本赤十字社愛知県支部や各地の消防署で日頃から講習会を実施している。

(4)地下街にいた場合

その日は友人と買い物をする約束をしていた。私は会社が終わって急ぎ足で待ち合わせ場所へと向かっていた。待ち合わせ場所は地下街にあるいつもの喫茶店であった。その日は師走の押し迫った時期でもあり、かつ夕方であったということもあり、地下街は非常に多くの人でにぎわっていた。

その時突然地震が起こり、大きな揺れが襲った。ショーウィンドウのガラスが割れ、通路に飛び散ってきた。みんな揺れの中で立っていることができず、床にしゃがみ込んだ。同時に、一瞬灯が消えたが、非常灯がすぐに点灯した。私は飛んできたガラスが当たり、腕にかすり傷を負ったが、大したことはなかった。しかし、この地下街に多くの人がいることを想像すると、たくさんの人が負傷したものと思われた。地震直後に停電であたりが一瞬暗くなったこともあって、私もそうだが、周辺にいる人々もあちこちで悲鳴を上げ、不安な精神状態に陥っている様子だった。ただ、この地下街は出入口が多く、その案内も比較的わかりやすく表示されており、出入口に殺到し死傷するといった大きなパニックは発生しなかった。

地下街において地震時に最も危険なのは、火を扱っている飲食店が多いため、火災が発生し、その煙から逃れようとする人々が限られた狭い出入口に殺到してパニックを起こすことだ²²。地下街の奥でぼやが発生したと聞いたが、大きな火災にはならなかったようでパニックにはならなかったが、真っ暗の状態が煙が充満した場面を想像するとぞっとするような光景になっていただろうと思った。

地下街は地上に比べて揺れが小さく、今回の地震では地下街自体がつぶれてしまうといった被害は発生しなかったが、地下街だから必ずしも安全という訳でなく、阪神・淡路大震災での地下鉄駅被害のような事態²³が発生する可能性もある。今回の地震ではガラスの飛散や看板の転倒・落下、陳列商品の落下などといった被害で収まったが、こうした過密空間における地震対策は日頃から必要であると感じた。私は待ち合わせ場所の喫茶店近くで友人と何とか落ち合うことができたが、その後地上に上がって見た光景は私たちが想像する以上の大きな被害様相であった。

(5)大規模集客施設にいた場合

今夜は18時からプロ野球日本シリーズ第7戦がナゴヤドームで行われる。僕と友人は根っからのドラゴンズファンで、久々の日本一を賭けたこの試合に徹夜で並んで入場を待っていた。今日は土曜日で客足も早く、開門2時間前にはゲート前に長蛇の列ができていた。おそらくは4万人のファンで満員に膨れあがるであろう。

²² 球技場やデパート、映画館、地下街等は閉鎖的空間であり、イベント開催時には場内の人口密度が高く、しかも他人同士の集まりであるため連帯感が希薄であり、混乱発生の危険性がある。そういった不特定多数の人々が高密度に集まる施設においては、人々が突如危険性を感じ、しかも情報不足の状態に身を置かれた場合、自分の身を守ろうと一斉に避難行動をとり、出入口等に殺到することがありうる。こうした状況下で、死傷者が発生する可能性がある。地震災害においては、揺れている間は、人々が一斉に行動を起こすような事態は考え難いが、揺れが収まった後に火災拡大や停電等複合的な被害が発生することで危険性を感じ、不安を増長するような状況が発生した場合、混乱発生の危険性がある。

²³ 比較的耐震性に優れていると考えられていた地下構造物でもかなりの被害を受けた箇所があった。神戸高速鉄道の大開駅や神戸市営地下鉄の上沢駅・三宮駅などでは中柱が圧壊するなどの被害が発生した。

開門時間も若干早まり、僕らは先を急ぐようにドームの中に入った。みんなこの試合のチケットを持っていることを誇りにしているかのような満足げな表情であり、こちらもなんだか嬉しくなったが、まさかこの後あんな大地震が発生しようとは思ってもよらなかった。

両チームのスターティングメンバーが登場し、ある意味張り詰めた雰囲気を感じられ、いよいよムードが高まってきた。プレーボールの合図を主審が告げ、第1球目がキャッチャーのミットに収まったその瞬間、ストライクとなったことへの拍手が響くと同時に、椅子がきしむような音がしてぐらぐらと大きな揺れを感じた。「地震だ！」僕はそう思ったものの、大きな横揺れに声をあげることもできず、椅子にしがみついてその場を動くことができなかった。選手たちもその場に座り込んでいた。揺れが数分も続いたが、その間にも我先にと出口へ急ぐ人が一部に発生した様子だった。僕は「こういう時こそじっとしていた方が混乱を招かず、逆に安心なのに。どうしてそんな行動をする人がいるのだろう。」と思ったが、場内放送でも「係員が誘導するまで、その場を動かさないください。大きな地震ですが、大丈夫です。係員の誘導に従い冷静に行動してください。」とのアナウンスがされた。揺れが収まり、特に大した被害も起きてなさそうな様子でもあったことから、僕をはじめお客さんの中には安堵の雰囲気が流れた。僕は様子を聞こうと携帯電話で家に電話したが、地震の影響と満員の客が同時にアクセスするせいでつながらなかった。近くにいた人は地震直後には話せていたようなのに、少し時間が経つことで全くつながらなくなっていた。

その後、係員の避難誘導に従い、順次避難した。放送によれば、鉄道各社は地震の影響で運行を停止しているらしく、今の時点では復旧の目途も立っていないとのことであった。僕らは日本シリーズが中止になったことを残念に思うよりも、まずは自分たちがこれからどうしたらよいのか、いつになったら家に帰ることができるのかと不安になった。ただ、日頃であれば話しかけることもない知らない人とお互いの不安やこれからの行動について話したり、携帯ラジオからの地震情報や交通情報を知らせ合ったりするなど、「被災者」同士で情報交換や話げができたことが心の安心に幾分でもつながったと思う。災害直後には正確な情報がわからなかったり、知りたい情報をすぐに得られないことが、正しくない噂を生み出したり、不安感を煽ったり、混乱を招いたりすることがあるため、行政や施設管理者などからの迅速で的確な情報伝達が必要だと感じたし、声の掛け合いや助け合いが重要だと感じた。

(6) 路上にいた場合

「危ない！」私は思わず叫んだ。アーケード入り口に建っていた大きなアーチ型の看板が倒れかけているのが見えた。

私は若者でにぎわっている繁華街を歩いていた。その日は日曜日のお昼時で、ぼうっとして歩いているとすぐ肩が触れ合うくらい多くの人でにぎわっていた。私と友人はウィンドウショッピングを楽しんでいたのだが、悪夢はその直後に発生した。

ガタガタと店のショーウィンドウが音を立てて揺れ始め、地震であることを知った。私は今まで外で地震を感じた経験がなかったので、すぐに気づけなかった

のだが、ガラスが揺れる音が大きくなるとともに、地震だということ、それもかなり大きな地震であることがわかった。揺れが大きくなり、店のガラスにひびが入った。さらに揺れが増したと同時に、そのガラスが割れ、辺りに飛び散ってきた。また、ビルの屋上あたりからは看板等も落ちてきた²⁴。周りには、突然の地震で呆然と立ち尽くす人、無意識のうちにしゃがみ込む人、建物の陰に逃げ込む人、建物の中から飛び出してくる人などがいた。私はとっさにしゃがみ込み、ハンドバックで頭を覆ったため、運よく怪我をせずに済んだ。しかし、隣にいた友人は飛んできたガラスの破片で腕に軽いかすり傷を負ってしまった。でも本当にかすり傷程度でよく済んだものだと思うほど、多くのガラス片が降り注いだ。

また、遠くでは、このアーケード街入り口に建っていたアーチ型看板が倒れようとしている瞬間が見えた。「ドーン」と大きな音を立て、その看板は崩れ落ちた。あまりの大きな揺れに耐えかねたように落ちていった。私は誰か犠牲者が出ただろうと直感した。そこは休日ともなれば若者たちの待ち合わせ場所として有名になっており、その周辺にはたくさんの人がいただろうと想像できたからである。やはり不幸にも真下にいた人が看板の直撃に遭い死亡し、数人が負傷した。

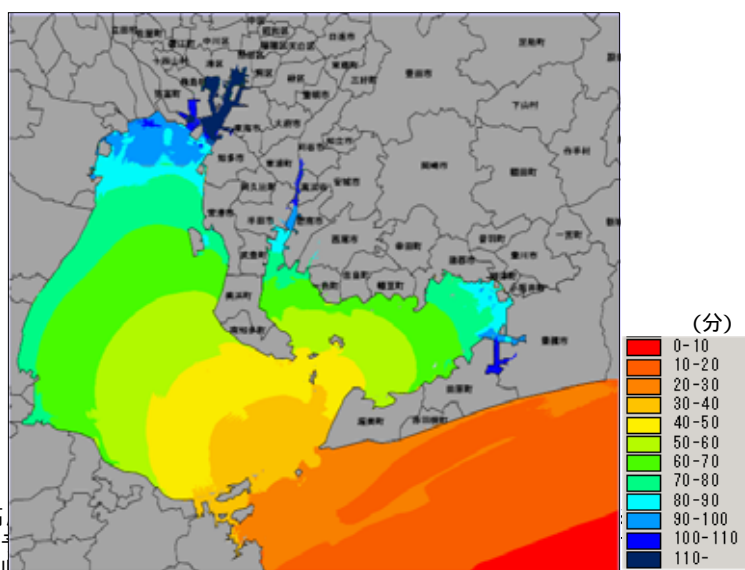
地震の揺れが収まり、辺りには負傷し倒れ込んだままの人、あまりの恐怖にしゃがみこんだまま泣いている人、店の中から外に飛び出してくる人、駅の方へ急ぐ人などで、さらにごった返した雰囲気になっていた。私は友人の腕をハンカチで押さえながら、とりあえず駅の方へと向かって行った。道路脇には自動販売機がいくつか倒れていた。「そうか、自動販売機も危険なのね」と初めて気づいた。地震時には倒れそうなものからはすぐに離れ、落ちてくるガラスや看板には持っているカバンなどで身を守ることが大事だと思った。

駅には多くの人が詰めかけていたが、電車も止まっているらしく、時間とともに混乱度を増した。

(7)沿岸部にいた場合

その時、私は海水浴場にいた。子供が夏休みということもあり、自宅からは遠かったが、休みをとってはるばるにぎわいを見せる海水浴場に子供を連れてやって来ていた。

太陽はちょうど真上、楽しそうにはしゃぐ子供にそろそろ昼食でも、と思った時に地震は発生した。その瞬間、たまたま海中で波に身を任せていた私自身は揺れを感じることはなかったが、浜辺にいる人が口々に「地震だ」と騒いでいる様子を見て、かなり大きな地震が起こった



²⁴ 落下物はオフィス街や繁華街等の中高板等の補強が十分でないものも多いとあることから、地震の際には揺れが

想定東海・東南海地震連動による津波の到達時間

ということを知ることができた。砂浜からほど近いところにいた私たちを含め、多くの海水浴客は慌てて浜辺から避難しようと右往左往した。浜辺に立ち並んだ海の家の一軒から火の手が上がった。コンロの火による火災である。火災はすぐに消火器により初期消火されたものの、火を見た人々は動転して、混乱はますます大きくなった。

「津波が来る！」そう思った時、辺り一帯に避難を指示する放送が入った。「津波警報が出ました。直ちに避難してください！避難してください！」

怯える子供の手をしっかりと握り、避難誘導に従い海岸道路の向こうに見える高台へと急いだ。駐車場に走る人もいたが、出口に殺到した車で大渋滞を起こしている。いずれにしても車による避難は危ないので止めた方がよいのに・・・。

この辺は海岸線の道路に沿ってホテルや民宿などの施設が並んでいる。また一般の民家も多い。木造建物のいくつかは倒壊していたり、壁が崩れかかっていたりしている。また、液状化を起こし、地面からずぶずぶと泥水が噴き出しているところもあったり、液状化の影響だろうか、傾いている建物もあった。

高台に向かって避難する人の列が続く。時間にして15分ぐらい走っただろうか、かなり高台まで来たときに海の方を見てみると、遠くの方にレジャーボートがいくつかそのまま海の上にあった。「津波が来るのに・・・彼らは地震を知らないのだろうか。」しかし、知らせる術もなく、私は子供を連れて避難するのが精一杯だった。

「パパ、足が痛いよぉ。」そう言って泣く子供の声で初めて気が付いた。逃げる時は気づかなかったが、我々二人は裸足だったため、焼けたアスファルトや瓦礫による怪我で足の裏から血が出ていた。「じゃあ、パパの背中において、おんぶしてあげるから頑張るんだよ。」と子供に声を掛けしゃがみ込んだ瞬間、「津波だ！」と誰かが叫んだ。その声に弾かれたように海を見たところ、津波がざあーと音を立てて押し寄せていた。もし、あのまま海にいたらと思っただけで済んだ。津波は第一波が必ずしも最も高いとはいえないようで、数時間の間、津波警報・注意報が解除されるまでは海辺に近づかないようにと拡声機の声が響いていた。

想定東海・東南海地震連動による津波の第1波が到達するのは渥美半島太平洋岸で地震発生後20～30分程度、伊良湖岬付近で30分程度、知多半島南端まで40～50分程度、名古屋港まで90分程度であり、避難する時間はある程度はあるが、夏の昼間に発災し、避難誘導・自主避難が遅れた場合には海水浴客等の間で大きな人的被害が発生するおそれはある。日本海中部地震でも沿岸にいた遠足客等100人が津波により死亡しており、揺れを感じたら高台や沿岸部から遠ざかるよう自主避難を心がけることが重要である。

(8) 山間地で移動中の場合

今日は夏休みに入って初めての日曜日。子供はおじいちゃんとおばあちゃんの家遊びに行くのを1週間も前から楽しみにしていた。おじいちゃんには魚釣りとカブトムシ採りに連れて行ってもらう約束なのだ。私も子供のために久々の休暇をとり、3泊4日の帰省を楽しみにしていた。

その日、名古屋は朝から蒸し暑かったが、私の田舎は山あいの町であるため、おそらくはかなり涼しいに違いないと期待していた。まだ朝の9時すぎだというのに、道路は非常に混んでいて、夏休みに入ったことを感じさせた。

山間の道にさしかかり、交通量もかなり減ったなあと感じたその時、突然大きな地震が発生した。小さな地震なら車に乗っていると気づかないものだが、この地震はかなり大きいようだ。私は路肩に車を止め、揺れが収まるのを待った。大きな横揺れが起こり、揺れが収まるまで数分もかかった。今までに感じたことのない大きな揺れではあったが、山の中で周辺に建物もない場所であったせいか、大した被害はなさそうに感じたので、特に気にも留めず、車を動かし始めた。

しかし、1キロほど進んだところで、道路上に大きな土砂崩れ²⁵が発生しており、道を大きくふさいでいた。実家へ帰るにはこの道を通らねばならず、足留めを食う形になってしまった。カーラジオでもこの地震について「ただいま東海地方で大きな地震が観測されました。各地の震度は次の通りです。震度7は静岡市、…」と速報が流れた。ふと、父母のことが気になり、携帯電話を使って連絡をしようとしたが、輻輳してつながらなかった。以前テレビの地震特番で、NTTが災害時には災害用伝言ダイヤル「171」²⁶を設置するため安否確認の手段として有効であると言う話を聞いていて、東海地震などが切迫しているということもあって、父母には災害時には171をダイヤルすれば家族の安否確認ができるそうだよと伝えてあったので、もしかしてと思い、171をダイヤルしてみた。しかし、父母のメッセージはまだ入っておらず、安否がすごく心配になってきた。

実家へと向かうこの一本道は交通量が少なかったのだが、土砂崩れの影響で後続にどんどんと車がつらなり始めた。しばらくすると、パトロールカーがやってきて、ここから先は進めない旨を案内した。私はパトロールの人たちにこの先の町の被害状況について尋ねたが、まだこの段階では何の情報も入っていないらしい。

私の実家は山の中の一軒家であり、家の裏には急傾斜が迫っているため、地震による被害がひどく心配であった。あまり地震が起きるということを真剣に考えたこともなかったのだが、大きな地震が発生した際にはあの急傾斜が崩壊するようなことはないのだろうかと心配になった。どうしても父母の安否を確認したかったのだが、どうすることもできず、結局、その日は道路閉鎖のため実家へは行けず、父母の安否も確認できなかった。また、もと来た道を引き返すにも至る所で交通規制がされており、ひどい交通渋滞であった。沿道の多くの古い建物が倒壊しているなど、阪神・淡路大震災を見ているかのようであった。

夜中になって私たちは何とか家にたどり着くことができた。家は無事であったが、停電も断水もしていたため、近くの避難所へ避難することになった。避難所には愛知県が整備した「避難所支援システム²⁷」があり、パソコン上で避難所の状況や安否を登録できるものがあった。それを使って、ようやく父母の安否を確認できた。父母は無事で、近くの避難所に避難していた。

²⁵ 地震後に大雨が重なる場合や余震が起きることによって土砂崩れが引き続き発生する可能性があるため、継続的な警戒が必要となる。

²⁶ 震度6弱以上の地震発生時、あるいは地震・噴火等の発生により被災地へ向かう安否確認のための通話等が増加し被災地へ向けての通話がつながりにくい状況(輻輳)になった場合に利用可能となる伝言ダイヤルシステムである。「171」をダイヤルし、利用ガイダンスに従って、伝言を録音・再生することができる。また、NTTドコモも「iモード災害用伝言板サービス」を運用しており、震度6弱以上の地震などの災害が発生した場合に設置される「災害用伝言板」を用いて安否情報等を登録・確認することができる。

²⁷ 避難所支援システムについては、<http://www.pref.aichi.jp/joho/hinanjo/index.html>を参照のこと。

(9) 東海地震の予知がなされた場合

朝一番のニュースが、東海地震観測情報が発表されたことを伝えていた。東海地震の前兆現象の可能性についてはすぐには評価できないが、何かしらの異常が確認されたい。キャスターは電車などの公共交通機関は平常通り運行していることを伝え、今すぐに東海地震が発生するわけではないということ、まだ避難所等へ避難する必要はないこと、ただし身の回りの準備だけは整えておいた方がよいということを伝えていた。私はちょうど出張の準備をしていたところであった。今日は大事な会議のある出張があったため、会社を休むわけにも行かず、妻と今後どうなるのか、どうするのかを話し合った。妻には、もし事態が悪い方へ向かった場合を考えて、近くの避難所へ避難するための準備と、火の元の始末、小学校へ通う子供のこと、足の悪い母のことをよろしく頼むと伝えて家を出た。一旦家を出たものの、言い残したことを思い出して、また家に戻り、出張先にいる時に地震が発生したら離ればなれになってしまうため、「落ち合う場所は自宅が近くの避難所とすること」「連絡手段は携帯電話のメールやNTT災害用伝言ダイヤルなどを使い、それらが使えない場合も考えて大阪の親戚宅を臨時の中継連絡先とすること」「子供は東海地震注意情報が出た段階で下校することになるから、迎えに行けばよいのか、集団下校になるのかを事前に確認しておいてほしいこと」などについて念を押すように伝えた。また、隣の家の人には「避難する際には母のことをよろしく頼みます」と一声掛けてから出かけた²⁸。

名古屋駅に行くと、そこではいつもと変わりのない通勤風景が流れており、私は新幹線で東京へと向かった²⁹。午後一番の会議に集中していたため、地震のことはすっかり頭の中から消えてしまっていたが、会議が終わった瞬間ふと心配になった。周りの人も特に何もその話はしていないし、持っていた携帯ラジオでもその情報は流れていなかった。

当初の予定では今晚は東京のホテルに泊まる予定であったが、家族のことが気にかかり今日のうちに帰宅することに決めた。午後3時を過ぎた頃、東京駅へと向かう途中の街頭テレビで、東海地震注意情報が発表されたことが伝えられていた。東海地震の前兆現象の可能性が高まったらしいのだ。東京駅では駅職員が放送でその情報を伝えるとともに、この段階では鉄道は通常通り運行するということも伝えていた。私は発券機に列を作って並んだ。

新幹線の指定席は1時間後まで満席の様子であったが、とにかく早く帰りたかったので次の新幹線の自由席に飛び乗り、名古屋へと急いだ。新幹線は満員で、車内での乗客の会話も地震の話ばかりであった。車内放送では、警戒宣言が発令された場合には最寄りの駅に停止する旨を繰り返し伝えた。乗客の不安を乗せたまま、新幹線は東海地震の震源域と言われる静岡県を通り過ぎ、かなり遅れたものの名古屋駅に無事到着した。名古屋駅ではいつにない混雑な状況が発生してい

²⁸ 「平成15年度防災（地震）に関する意識調査」（愛知県）によれば、近所付き合いの程度については、「困った時に助け合える」（28.8%）、「お互いに訪問し合う」（5.8%）、「立ち話くらいはする」（30.6%）、「あいさつだけはする」（27.7%）、「ほとんど付き合いがない」（5.9%）であった。日頃から近所付き合いがなされているほど、災害時においても連携した防災活動が円滑に実施されると考えられる。

²⁹ 公共交通機関は、東海地震観測情報・注意情報の段階では基本的には通常通り運行し、警戒宣言が発令された場合には運行を停止することになっている。新幹線においては、警戒宣言が発令された場合には最寄りの駅に停車する。なお、名古屋 - 新大阪間は新幹線の運行を原則継続することになっている。

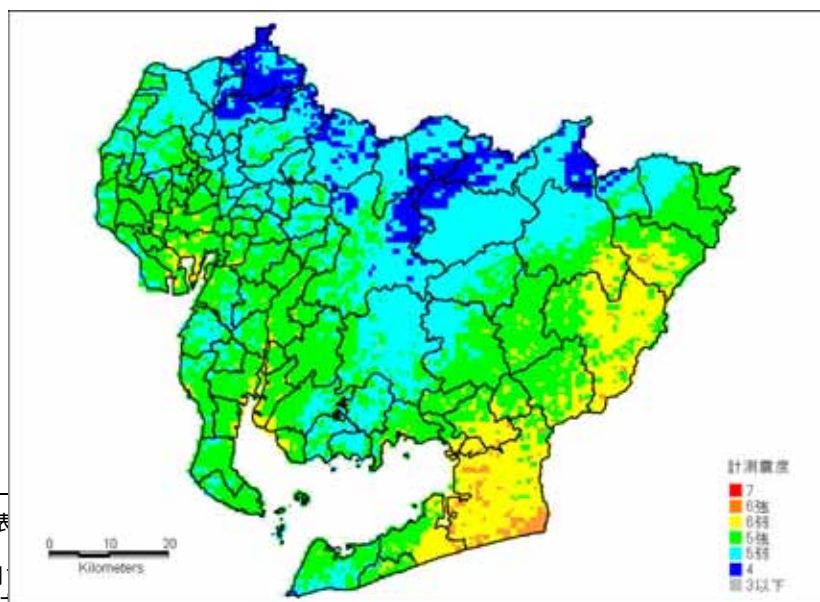
たが、東海地震注意情報が発令されて数時間が経過しており、また、通常のラッシュアワーも過ぎていたため、多くの方が帰宅できたらしい。私も地下鉄で家へと急ぎ、普通より時間はかかったものの、何とか家にたどり着くことができた。

家に帰り、家族の顔を見てほっとした瞬間、テレビニュースが警戒宣言の発令を伝えた。「大変なことになった。もうすぐ大地震が起きるかもしれない。」と思い、かなり不安になったが、今回は東海地震観測情報が発表されてからかなり時間の猶予があったこともあって³⁰、地震がいつ起きてもいいようにと準備を万端に整えておくことができていた（風呂おけへの水のため置き、非常持ち出し品の確認、非常食料・飲料水の確認、救急箱の確認、携帯ラジオ・懐中電灯・予備電池の確認、家具等危険な物のない部屋での待機、避難方法の確認など³¹）。また、私の家はまだ建てて数年しか経っておらず耐震性は十分であると思われたので、避難はせずに自宅で待機することにした。自宅建物の耐震性が低い家庭³²では、自宅の庭や指定された避難場所など基本的には屋外に避難したと言う。また、ニュースによれば、東海地震観測情報が発表されて以来、電話が輻輳するなどの被害が発生したり、コンビニ等へ食料を求めて住民が殺到するなどの混乱が発生しているとのことであった。私たちの家では阪神・淡路大震災以降、家庭での防災対策を進めてきたつもりであり、家には最低3日分家族が暮らせるだけの食料や飲料水も備蓄していたし、準備していたものの確認をするだけの対応で済んだため、他の家庭に比べれば混乱は少ない方であったと思う。

今夜は家族全員、家具など地震時に危険な物のない部屋に集まって、寝ることにした。母や妻は「恐ろしくて寝られんわ」と言っていたが、私は地震への不安はあったものの、いつ起きるかもわからないし、体力的にも精神的にも疲れていたせい、すぐに眠りについた。

気が付いてみると、もう明け方になっており、つけっぱなしにしていたテレビでは静岡県御前崎など想定される震源近くからの現地リポートがひっきりなしに流れていた。やはり母と妻は寝られなかったらしい。「いつ地震は起きるのか」時間が経てば経つほど不安が増した。

そして運命の8時15分、東海地震は発生した。静岡県や愛知県東部を中心に震度6強以上の揺れに見舞われ、甚大な



³⁰ 東海地震観測情報・注意情報発表中に短い可能性もある。

³¹ 「平成15年度防災(地震)に関する調査報告書」(国土交通省)より。実施されているもの上位3つは「避難経路の確認」(34.3%)、「風呂への水のためおき置き」(30.5%)、「非常食・飲料水の準備」(20.7%)である。また、「防災についての家族の役割を決めている」(1.2%)、「警戒宣言発令前後の家族の行動を決めている」(3.4%)、「ガラスの飛散防止」(3.9%)である。一方、「特にしているものはない」と回答した人は13.3%である。

³² 一部を除く各市町村では、昭和56年5月以前着工の在来軸組構法の木造住宅については、無料耐震診断や耐震改修補助を実施しているので、自宅建物の耐震性についてしっかりと把握しておくことが重要である。

被害が発生したが、避難など事前対策のおかげもあって、発生した建物被害の多さに比べると失われた人命は比較的少なかったのではないかとのことであった³³。私たちの住んでいる地域では震度5強程度の揺れであり、一部で被害は出たものの、私の家は部屋に物が散乱した以外は特に大きな被害にはならなかった。

（参考）非常持ち出し品チェックリスト

男性で15kg程度、女性で10kg程度を目安に、リュックサックに以下のものを準備しておくといよい。

食料関係

水（1人1日3ℓを目安）

乾パンやクラッカー、缶詰（最低3日分程度）

レトルト食品

鍋や水筒

ナイフ、缶切り

粉ミルク・ほ乳瓶（赤ちゃんがいる場合）

日用品

卓上コンロ 携帯ラジオ 懐中電灯 マッチやライター

ヘルメット ロープ 予備電池 包装用ラップ

生理用品 軍手 使い捨てカイロ 筆記用具

大きめのゴミ袋 ティッシュ・ウェットティッシュ 防塵マスク

安全対策関係

救急医薬品 防災ずきんや帽子 常備薬の予備 底の厚い靴

衣類関係

雨具 寝袋 タオルや毛布 衣類や下着

貴重品

現金（小銭も） 印鑑 預金通帳・有価証券等の権利証書

連絡カードや身分を証明するもの

³³ 愛知県の地震被害想定結果（平成15年3月）によれば、東海地震が発生した場合、予知がなされ事前対策をとるのに十分な時間がある場合には、突発的に地震が発生する場合に比べて人的被害は半分以下になると想定される（冬5時発生の場合の死者は、予知なしケースで約270人、予知ありケースで約120人）。